

能古の歴史

高 田 茂 廣

1 はじめに

能古島は古く小さく美しい島である。しかも、かつて対外交渉の基地であり、朝鮮半島を前面にした港湾都市博多の沖にあって、約2千年間にわたる対外交渉の歴史的事実を見続けてきた島でもある。したがって日本史の縮図ともいえる事績を数多く有する島でもある。

しかし、島外の人から見れば悠久の自然と歴史を保存しているかのように見えるのであろう能古島にも、ここ数十年間にわたって近代化の波が押し寄せ、多くの有形無形の歴史的遺産及び地質学的遺産を消し去ったことも事実である。

今回、福岡市教育委員会によって島の考古学的調査がなされ、そのこと自体は島の住民にとっては有り難いことなのだが、もし、今回のような調査が50年ほど以前に行われていたならば数倍する成果があったであろうと多少とも残念である。

以下、能古島の歴史についての概略を述べるが、今までに能古の歴史について大きく言及した資料は次の通りであり、今回の執筆もそれらを参考とした部分が多い。

『筑前国続風土記』	貝原益軒著	元禄期
『筑前国続風土記付録』	加藤一純他著	寛政期
『筑前国続風土記拾遺』	青柳種信他著	文政期
『太宰管内誌』	伊藤常足著	天保12年
『福岡県地理全史』	福岡県	明治13年
『早良郡志』	早良郡役所	大正12年
『残島村史』	残島尋常高等小学校	大正11年（未発表）
『残島村史稿』	伊東尾四郎著	昭和16年（未発表）
『筑豊沿海誌』	筑豊水産組合	大正6年
『能古島物語』	高田茂廣著	昭和46年
『筑前五ヶ浦廻船』	高田茂廣著	昭和51年
『能古小学校百年誌』	能古小学校百周年記念誌委員会	昭和60年

2 能古の地名について

現在の島名である「ノコ」或いは「ノコノシマ」に「能古」或いは「能古島」の漢字が当て

られるようになったのは昭和16年に福岡市に合併したとき以来のことであるが、それ以前には色々の漢字が当てられてきた。その最も古いものは天平3年(731)の頃、「ノコ」が那珂郡住吉神社の所領であったことを示す『平安遺文』の中の次の文章における能護嶋である。

筑前国那珂郡住吉荒魂社三前

右社者撃熊龍二国新羅国時 遣唐使将御社祭太宰府例供也、并能護嶋為御厨所領(以下略)

ついで『万葉集卷十五』の遣新羅使の歌(天平8年)における「能許」がある。以後承和8年(847)における慈覚大師の『入唐求法巡礼行記』における「能拳」、『延喜式』(903-928)における「能巨」、『小右記』(982-1032)における「能古」、『八幡大菩薩愚童訓』(鎌倉後期)や鐵庵道生の『鈍鐵集』(1359)・絶海中津の『蕉堅稿』(室町初期)等における「野古」があるが、近世になると「残島」が一般的に使われるようになる。

ところで、この「ノコ」という語の意味が不明である。玄界灘一帯には「シカノシマ」・「アイノシマ」・「オロノシマ」・「カジメノオオシマ」・「ジノシマ」等と意味不明の島名を持つ島が多いが能古島同様古い地名なのであろう。なお、これらの島名には総て助詞の「ノ」が使われているが、太平洋岸の多くの島に城ヶ島や鬼界が島などと「ガ」が使われているのときわめて対照的である。

能古の島名の由来について『筑前国続風土記』は次のように述べている。

能古島 能古浦名所也。或能解浦とかけり。今は残島と書。

朝野群載には那珂郡とし、藻塩草には志摩郡とす。共にたがえり。此島は早良郡の正北にあり。那珂郡、志摩郡にはへた、りぬれば、早良郡に属すべし。故にいまは早良郡とす。福岡より海上二里あり。島のめぐり二里二町十三間あり。東西十五町、南北三十町、高さ一町廿四間、満山芒を生ず。村人は是を刈販て家産とす。是を買者は屋のふきかやとし、薪とす。村中に白髭大明神の社あり。是住吉の明神也。村翁の説に神功皇后、異国より御帰朝の時此島に住吉の神霊を残し留めて異国降伏をいのり給ふ。よって残島と云といへり。(後略)

以上であるが、能古島が那珂郡、或は志摩郡に属していたことについて、貝原益軒が間違いであると断定していることには、多少の疑問を感じる。

3 古代の能古島

能古の田畑を歩くと多くの黒曜石の破片を拾うことが出来る。また現在のアイランドパークの「牛の水」付近からは、かつて大量の石斧類が出土したことがある。さらに山中では幾つかの古墳に出会うこともある。それらの詳しいことについては今回の調査の報告として述べられるであろうから省くが、素人の目から見ても古代も現代も人の住みやすい場所は同じであるこ

とを実感する。

これら考古学的なことは別として、文献や伝承における能古の古代史は大いにドラマチックである。

白鬚神社

考古学的遺物は能古における弥生以降の集落の存在を決定的にするのだが、古代日本の集落の精神的支柱として神の存在があったことは確かなことであろう。その神の宿る社として白鬚神社がある。

先年、白鬚神社の改築の際、関係者の了解を得て御神体を奉納した箱の裏側の文字を読ませてもらったが、深夜の懐中電灯に照らされた其の箱には、「白鬚の神が本の辻より古宮の地に移されしは白鳳元年なり」とあった。勿論後年になって書かれたものであろうが、「白鳳」とは九州年号であり大化元年(645)とされており、次に述べる防人の存在などからすると不可能な年代ではない。

伝承によると、白鬚神社のご神体はもともと能古山頂に近い本の辻に現存する巨岩であったということだが、これも古代信仰の根源的な姿であろう。白鬚神社が檀一雄邸のすぐ上にある古宮から現在地へいつ移転したかは不明であるが、『慶長検地帳』に既に古宮の地名の記載があり、中世のいずれかの段階で移転が行われたであろうことを示唆する。

先に述べた『筑前国続風土記』の記載にあるように、白鬚神社が住吉神であり、博多の住吉神社と深い関係を持っていたことからすると、能古の近世末までの在り方であった海運が、古代からの伝統であっただろうことを示唆するものである。

也良の防人

『万葉集卷十六』に「筑前国の志賀の白水郎の歌十首」と題する歌があるが、その中に次の二首がある。

沖つ鳥鴨といふ舟の帰り来ば也良の防人早く告げこそ (3866)

沖津鳥鴨といふ舟は也良の崎廻みて漕ぎ来と聞こえ来ぬかも (3867)

也良の崎とは能古島北端の地名であり、現在アイランドパークとなっている場所のことである。防人とは、何回となく朝鮮半島に出兵していた日本が、天智2年(663)に白村江の戦いに破れた結果、太宰府防備のために水城をはじめ玄界灘一体に置いた兵士のことであるが、その場所を特定できるのは『万葉集』による也良の崎だけである。防人は一ヶ所に約30人が置かれたが、同時に連絡のために大量の火を燃やし、煙で遠隔地に事を知らせる「烽」も置かれた。

先年、也良崎の玄界島から博多・太宰府まで見晴らせる場所から大量の消し炭が出土したことがあった。筆者はこれが烽の跡ではないかと思ったのだが、近世になって朝鮮通信使が玄界

沖を通過するとき、能古島で火を炊いたという記事が福岡藩の『朝鮮人来聘之記録』（福岡県立図書館蔵）のなかにあり、同じ場所であった可能性もある。

能巨鳴牛牧

約千年前に書かれた『延喜式』（延長5年—927年編）に「能巨鳴牛牧」の記述がある。時代的に云えば中世の頃に入れるべきなのであろうが、筆者としては、牛牧そのものの存在が防人と重なり、或いは防人と共に極端に云えば弥生時代まで遡るのではないかとさえ思えるのである。

牛牧の遺蹟である「牛の水」は也良崎の中に存在する。しかもそこからは大量の石斧が出土した。付近からは黒曜石の破片も収集することが出来る。現代の常識からすると人が日常生活をするには適さなかったであろう場所からの出土であってみれば、何らかの施設の存在を考えなければならないからである。

防人や牛牧の牧童たちの生活の場所は勤務の地から300mも離れた小川の付近ではなかったかと考えている。現在も4、5軒の集落があり、昭和になって大泊地区が開拓されたとき、最初に人家が出来た場所でもある。2軒目の永田氏の家が建てられたとき、数十個の礎石が出土したということであるが、残念ながら60数年前のことであり、確認することが出来ない。

牛牧の守護神である牧の神神社が也良崎のすぐ近くにある。これも初元は古代に遡るのではないと思うのだが、現在の石祠は近世になって寛政11年（1799）猫岩窪に再建され、文化12年（1815）鉢ヶ窪に移転し、さらに大正には白鬚神社境内、昭和になって現在地と移転を繰り返しており、最初どこに建てられたかは不明である。

なお、牛牧はその後馬牧や鹿の狩り場などへと姿を変えながら近世末まで続くが、島内における牛馬数は圧倒的に牛が多く、昭和20年代まで続いた。

北浦城

能古の栈橋を降りて北浦へ向うその入り口の所に、小さな丘の岬があり「城」と呼ばれている。城というよりも砦といった方が正しいのではないと思うのだが、堀切も残っている。おそらく伝承によるものであろうが、『筑前国続風土記拾遺』や『早良郡志』には是を築城した者として山上憶良と藤原純友の家臣伊賀寿太郎という者の2説を挙げている。

山上憶良の場合には防人や牛牧との関連が考えられ、伊賀寿太郎の場合には後世の海運との関連が考えられる。博多や太宰府を攻めた純友の乱は天慶2年（939）であるから両者の間には数百年の開きがあるが、ともあれ城跡は存在しているのである。

20年ほど前、城跡の畑の耕作をしていた人から「半鐘のような物が出土したので、小屋のなかにほおり込んでいる」という話を聞き、「もしかしたら大変な物かもしれませんよ」といったら、その人は慌てて家に帰られたが、残念ながら既に無かったとのことであった。

4 中世の能古島

中世に関する能古の資料は残念ながら極めて少ない。しかし、わずかに残っている資料を総合すると、能古は港であり対外交渉の地でもある。特に刀伊の乱と元寇は、極めて短い期間ではあったが太平洋戦争以前において外国から占領されたという、日本でも数少ない悲惨な歴史を有するのである。

刀伊の乱

「刀伊」とは、朝鮮語で「ジョルチン族—女真族」を指す言葉である。『朝野群載』や『小右記』によれば、この刀伊が総勢3000人、50艘の船で北部九州を襲ったのは寛仁3年（1019）のことであった。対馬や壱岐で大虐殺を行い、能古に上陸したのは4月8日のことであったが、彼らが能古を去るのは4月11日だから3日間の被害ということになる。この内2日は海が荒れており、島内での掠奪を恣にしたであろうことが考えられる。『小右記』による能古の被害は次の通りであった。

能古島 人9人 女6人 童3人 駄44匹 牛21頭

人の被害の少なさは前もっての避難があったのだろうが、牛馬の被害ともなると早良郡全体の被害よりもはるかに多く、志摩郡の被害に匹敵する。

元寇

博多湾を中心に展開された文永・弘安の役は日本史最大の危機に直面した事件であり、鎌倉幕府を崩壊に至らしめた戦いでもあった。能古はその戦役の場の中心に位置した島である。博多湾沿岸に広がる元寇防塁は今にその歴史の跡を物語っているが、能古に関する関連の資料ともなると、防塁の一部に能古産の石が使用されているといったことだけである。元寇に関する地元の文書資料が皆無の状態であってみれば仕方の無いことであろうが、京都で書かれたという『八幡大菩薩愚童訓』によれば、弘安4年（1281）の襲来について、「蒙古大唐の舟は対馬には寄らず、壱岐の島に着。それより宮崎の前なる野古・志賀二の島にそ付にける。」

とあり、わずかに能古島上陸の史実を伝えるのだが、文永11年（1274）の場合も状況判断からすれば元軍の能古島上陸は当然考えられる。

明治の終わり頃、西の一角で散乱した状態での人骨が大量に出土したが、当時の人々はそれを元寇に関わるものとして丁重に葬り現在に至っている。

湊と寺

古代から防人や牛牧が置かれ、刀伊の入寇があったりしたのであれば、当然のことながら港としての機能も持っていたと考えるべきであり、能古の地名の項であげた慈覚大師の「博太の西南能拳嶋下に泊船す」もその例の一つであろうが、明確な資料として「戊子入明記」（大日本資料8巻）がある。それによると、文正元年（1466）の明への朝貢品の一つとして硫黄があり、

その保管場所は箱崎・志賀・野古であった。能古に保管された硫黄は1万斤であったという。この硫黄が保管された所、つまり港は能古の何処であったのであろうか。考えられるのは北浦と江の口のどちらかである。

確たる年代ははっきりしないが、おそらく元寇の直前くらいに博多聖福寺の16代住職であった鐵安道生（1262－1331）の詩集『鈍鐵集』の中に「博多八景」があり、その最後に「野古帰帆」と題した詩がある。訳すれば次の通りである。

野古帰帆

晩楼に目を極むれば水と天と寛く
雲影の取る辺に山影寒し
杳々と遙かに泛べる鳧雁かと疑いたるは
李花の一曲にて漁灘を過ぎぬ

詩の内容はともかくとして、題は能古に帆船と湊があった事が示すものである。

室町時代の五山文学を代表する絶海中津（1336－1405）の詩集『蕉堅稿』の中にも能古で詠じた詩がある。おそらく彼が中国へ渡る途中の詩ではないかと思われるが、次の通りである。

題野古島僧房壁

絶島一螺の砦 扁舟を数夜維ぐ
偶来る幽隠の地 老僧と共に期するに似たり
衲を脱いで松樹に掛け 茶を煎るに竹枝を焼く
重遊を定むは何時の日ぞ 別れに臨み嘆きて詩を題す

この詩も能古が港であったことを示すが、同時に寺が存在していたことも照明する。「慶長検地帳」によれば、近世初頭に能古には寺が三ヶ所在ったようである。この検地帳は現存しないが、『残島村史稿』（昭和16年）の中で伊東尾四郎氏は次のように述べている。

「検地帳に載せたる寺三あり。即ち、養油軒・立泉寺・神宮寺にして、其の居屋敷、即ち宅地面積、養油軒は三畝拾坪、立泉寺は二畝拾七坪、神宮寺は拾七坪なり。而して三寺共に田畠を多く所有せり。立泉寺のありし事は今の人は全く知らず。神宮寺は白髭神社の宮寺なり。（以下略）」

この三寺の内、神宮寺は永福寺と寺号を変えて現存し、養油軒は寛政四年（1792）の火事によって焼失し、江の口から西へと場所を変えて現在では観音堂となっている。立泉寺の場合は『筑前国続風土記付録』にも載せられておらず、何処が所在地であったか不明であるが、北浦

の山中に少しの湿地を含む屋敷跡らしい場所があり、その側には鎌倉末期まで遡れる宝篋印塔があることから、ここが立泉寺跡ではないかと考えており、絶海中津が立ち寄った寺もここではないかと考えられる。なお、能古には松の巨木が昭和30年代までは島内各地に数多くあり見事であったが、その後の松食虫や海岸の急激な浸食の被害で姿を消してしまった。

4 近世の能古島

近世の能古は「残島浦」として浦奉行の支配下にあった。浦とは主として海に生活の場を求める集落のことであり、軍事力としての水夫役22名を負担する場所でもあった。能古の場合は「漁業一切仕らず候」の浦であり、後で述べる五ヶ浦廻船の基地として海運業を専らとする浦であったが、島の南岸に点在する北浦・東・江の口・西の四集落の後背地には多少の田畠もあり、石高も400石と小さな村の石高よりは大きな生産高を持っていた。島を東西に分断するように築かれた「鹿垣」から北は古代から続いたであろう牧場であり、それも牛から馬へと変化し、近世末期には藩の鹿の狩り場として600頭ほどの鹿が生息し、藩主をはじめ秋月藩主や時には長崎のグラバーなども訪れるという社交の場でもあった。また、一時的に磁器の生産も行われ、幕末期には台場が置かれるなど、多種多様の生き方をした島であった。

五ヶ浦廻船

近世初頭から明治初頭までの間、能古・今津・浜崎・宮浦・唐泊の五つの浦に当時としては極めて大規模な廻船集団があり、「五ヶ浦廻船」と呼ばれた。

『五ヶ浦廻船方記録』によれば、最盛期の正保から享保年間にかけては最大艘数50余艘であり、一艘平均の石数も1300石を越えていた。この石数は当時の筑前五ヶ浦以外の商船石数全部を合わせた石数をはるかに凌ぐ石数であり、全国的に見ても江戸・大坂に次ぐ数字である。この内、能古の船数は20艘を越えていたと考えられるが、衰退期に入っていた明和9年でも確認できる能古の廻船の総数は12艘であり、総石数16351石、1艘平均にしても1362石であった。当時、筑前の他の浦の商船の平均石数は50石－70石であった。

五ヶ浦廻船の活動範囲は全国に及び、北は北海道の石狩川河口や浦河から、太平洋岸の各地など、高知県・鹿児島県・宮崎県・沖縄県を除く海に隣接する府県の総てに及ぶ。

その積み荷の多くは筑前をはじめ東北・北陸諸藩、それに幕府の米や北海道・東北・北陸の材木であり、それらを江戸・大坂に運ぶのが主たるものであったが、このような仕事をするようになったのは、宮浦出身の筑前屋作右衛門が河村瑞軒のあとを継いで全国の廻船差配に就任したことによる。なお、筑前では廻船とは500石以上の船のことであり、五ヶ浦だけに許可された船であったのに対し、商船とは500以下の買積み船であった。

しかしながら、2百数十年の間には確認できただけでも2百艘を越える遭難があった。能古の村丸のルソン島への遭難をはじめ、ミンダナオへの漂着など4艘の外国への漂流の結果、浜

崎・今津の廻船は帰国の機会がありながら帰国しなかったという宗教的理由で壊滅し、能古の5艘をはじめとする12艘が鹿島灘沖で同時に遭難するなどのこともあり、福岡藩の低運賃や人的損失も原因して宝暦以降衰退への道をたどり、幕藩体制と密着していたこともあって、明治維新と共に完全に姿を消すのである。

これだけの海運集団が何時どのようにして発生したのかということになると不明であるが、五ヶ浦は中世末において既に松浦党的な性格を持つ集団であったと考えられ、黒田長政の筑前入国とともに其の支配下に入ったと考えるのが最も妥当のようである。黒田長政は福岡城の他、江戸城・名古屋城・大阪城の築城に関わり数百艘の石船を建造するが、福岡城築城のための石は能古・今津・唐泊から採取しており、築城が終了した元和以降の石船の平和利用として五ヶ浦に払い下げたのではないかと考える。

鹿垣

能古に現存する遺蹟のなかで最も壮大なものは鹿垣である。猪垣や猪鹿垣とも書くが正式には猪鹿防土手と書く。通常「古土手」と呼ばれているものと「鹿垣」の二つが在る。古土手の方は小平谷付近を東西に数百メートル流れる石塁であるが、その成立等の記録は全く残っていない。鹿垣の方は早田付近を北浦の大瀬海岸から西の白鳥まで2キロ近くの距離を東西に渡って築かれた石塁である。記録によると完成は天保7年（1836）であるが、寛政10年（1798）に秋月藩主が鹿狩に訪れ、二日間で鹿170－180頭の鹿を捕った記録があることからすると鹿垣の工事そのものの始まりはそれ以前からであると考えべきであろう。

能古焼

永福寺の裏山、能古博物館の敷地内に大きな窯跡がある。我々は勝手に能古焼窯跡と称しているが付近から出土する欠片の大半は磁器片である。『筑前国続風土記付録』によれば「明和の頃より此島にて陶器を製す」とあり、『同拾遺』には「いく程なく其事止みたり」とあるから、明和から寛政年間まで30年内外の間生産が続けられたと考えられる。なお、伝承によれば陶土としては同所の土を使い、釉薬は天草から運ばれたという。

近世において筑前で磁器が生産されたのは須恵と能古くらいのものであり、其の意味では貴重な遺蹟であるが、残念ながら現存する製品は1点しかない。

御台場跡

幕末の頃、福岡藩は博多湾を中心に幾つかの台場を築いたが其一つが能古島であった。『残島村史稿』には次のように書かれているが、伊東尾四郎氏は其の前半部分について何に依ったかを明記しておられない。

「文久元年（1861）福岡藩は海岸地方に砲台を築き、残島に於いては松尾（能古灯台の東側）にこれを築けり。総積三百三十六坪、砲台地二百五十六坪、火薬庫十一坪、番衛地二十九坪。

『福岡県地理全誌』に

砲台跡、北浦人家の北十町許り、巡田と云う所にあり。南北六間、東西四間許あり。文久元年酉新築、明治三年に廃す。」

以上であるが、能古の歴史の最初である防人と、近世最後の史実である台場が国防に関することであることは運命的でもある。この後、文久3年にはこの台場と志賀島の台場の間に、外国船の侵入を防ぐための筏が作られたが一度も使用されず、慶応2年には英国船による軍事訓練が行われ、能古の台場付近が標的となった。（『見聞略記』による）

5 能古の戸数と人口

現在、能古の集落は、西・江の口・東・北浦・大泊の5町内から成っているが、この内、大泊は昭和になって開拓が始まり成立した集落である。したがって近世までは前記の内の4集落で構成されていた。もっとも、中世の段階では北浦と江の口の2集落であったのが江の口の膨張により東と西に分離していったと考えられるのだが、これは推論にすぎない。

戸数についての正確な数字の記録として『筑前国続風土記』の次の文言がある。

「残島、民家七十九戸、神社、寺院あり」

ところが、この記録とはほぼ同時期と考えられる宝永4年（1707）の『福岡藩町郡浦御用帳』によると、北浦が火事になり、25戸が焼けている。この25戸が北浦の全戸数であったとすると、西・江の口・東の戸数は54戸であったということになる。

寛政4年（1792）になると、今度は西・江の口・東が火事になり106戸が焼ける。このとき、東の3戸が焼け残ったというから、西・江の口・東の戸数は109戸であったということになるのだが、北浦の戸数が30戸内外であったとして、140戸程度が寛政年間の戸数であったと推定できる。先の数字と比較するとほぼ倍増の数字であるが、北浦の場合は地形の制約もあり、現在でも約30戸である。この倍増の数字は、他の村浦が享保の大飢饉によって人口と戸数を大きく減少させたのと対照的な数字でもある。能古は海運の島として飢饉の被害を免れた数少ない場所であった。

天保12年（1841）になると戸数に加えて人口もはじめて記録として登場する。「書上」によると次の通りである。

残島

- 一 家数 百拾六軒 枝浦共
 - 内 七拾貳軒 農人
 - 四拾七軒 廻船乗
 - 三軒 商人
- 一 人数 四百三拾三人
 - 内 男貳百拾六人

女貳百拾七人

戸数の場合、寛政の数字と比べて20数戸の減少であるが、これは海運業の衰退と大きくかわっていると考えられ、この時点で既に廻船業の農業と逆転がみられる。人口も1戸平均で3.73と少ないが、これは当時の筑前における浦の平均的数字であり、多くの農村の場合でも4人を少し越えた数が普通であった。

6 終わりに

以上、能古島の歴史についての近世までを述べてきたが、枚数の制限もあり、残念ながら詳しい記述をすることが出来なかった。したがって、島に残る遺蹟と関連する事項を中心として話を進めたが、能古の歴史の概略は書いたつもりである。

明治以降、能古は農業と漁業の島へと変貌を遂げる。かつての廻船業の時代と比べて遭難による多数の死者を出すなどの悲惨は無くなり、平和な時代をむかえたが、同時に大きな産業を持たない貧乏な島へと転落の時代でもあった。現職の村長が移民としてブラジルへ渡るといったこともあった。昭和16年には福岡市に合併し、太平洋戦争時代の末期には北浦に特攻隊の基地としての工事が始まろうとしたが、これは終戦と同時に頓挫した。

戦後は大泊の急激な開墾が始まり、昭和27年にはランプの生活に別れをつけて電灯がともった。数年後には永年悩まされ続けた水不足から開放される水道も海底ケーブルによって設置された。そして、ここ10数年は観光化の波が押し寄せた。このようなことは島に住む者の生活を便利にはしたが、其の結果多くの遺蹟も破壊された。

現在、能古は観光の島として年間数十万の観光客が訪れる島である。しかし、昭和30年代には1500人もあった人口が1000人に減少し、過疎化への道を進めている島でもある。能古に住む者の多くはどうか対応したらよいか真剣な模索の最中であるが、少なくともこれ以上の歴史と自然の破壊だけはしたくないというのが大半の意見である。

そういう意味で、今回の調査の結果を、島民の多くが見つめ、期待し、感謝していることを付記して拙稿を終える。



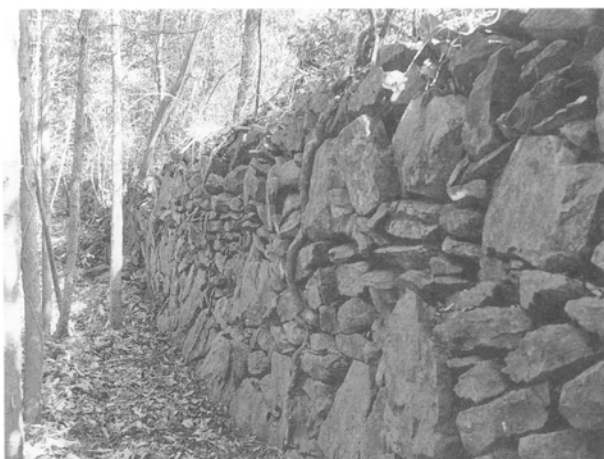
也良岬（南から、奥は志賀島）



万葉歌碑

沖つ鳥
鴨とふ船の
還り来ば
也良の崎守
早く告げこそ

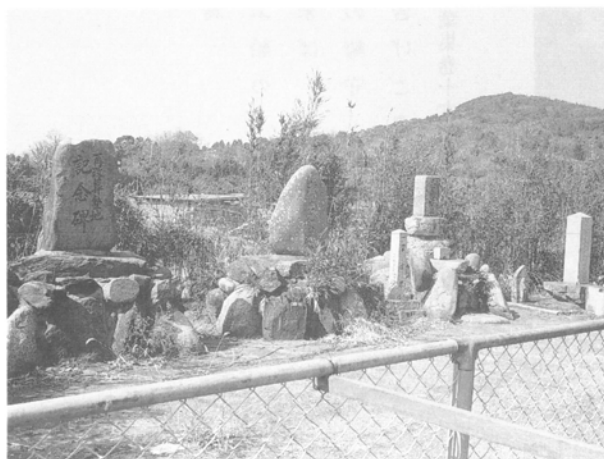
（万葉集卷十六、三八六六）



10



9



8



7



2



3

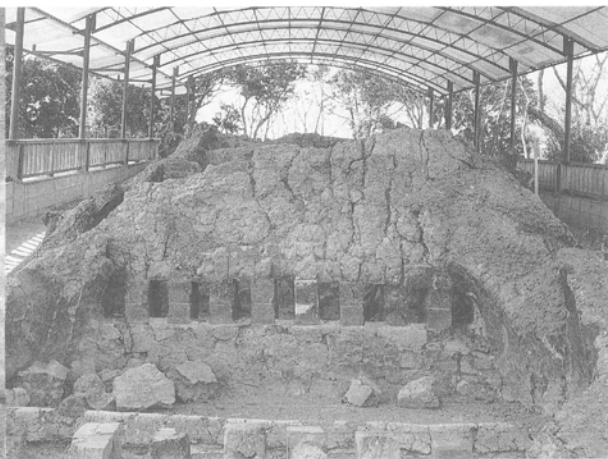
1. 也良岬出土の石鏃
2. 牛の水の土塁
3. 牧の神社
4. 北浦城跡（北西から）
5. 能古焼窯跡
6. 永福寺箱式石棺墓
7. 白鬚神社
8. 蒙古塚
9. 早田古墳2号墳
10. 鹿垣



4



6



5